



Fig. 4 報告会を報道する新聞

吉野台の細石器発掘

名取 武光

浦幌村の篤農家飯山伝平さんの裏山に当る吉野台からは、細石器と呼ばれる特殊な石器と土器とが同じ地層から発掘されることが、篤学者斎藤米太郎さんによって昭和9年に発見され、同16年（筆者注）に学界に発表されていた。この種の遺跡は現在日本に一つしかないので、これを充分に調査したうえ北海道の史跡として指定し、貴重な文化財として保護を加えようという計画が、今年の3月に道教委の史跡調査委員会で決定され、浦幌村の村長さんを始め皆様の御協力によって、7月14日から15日間の発掘調査が進められる運びになった。吉野中学、浦幌中、小学校、帯広柏葉高校生などの熱心な協力によって、24日現在までに72坪を層位的に調査し、約3千5

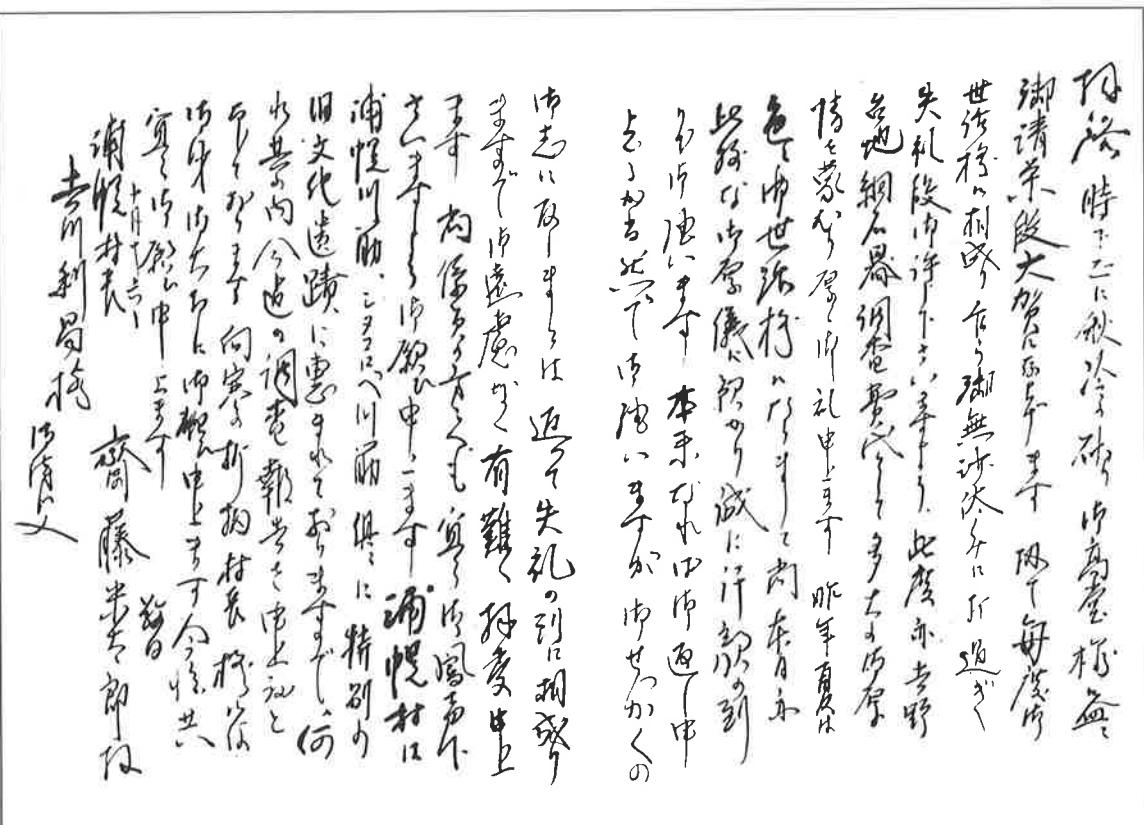


Fig. 5 斎藤米太郎から浦幌村長への礼状

百点の遺物を得た。その中には今までこの遺跡から発見されたことのない、美事に加工した石製の耳環があり、又地下1米30厘の地層まで掘りこんだ楕円形の遺跡が二ヶ所に発見され、多数の細石器や土器がその中から掘り出された。これはその当時の入達の墳墓であったに相違ない。

こん度の発掘の結果、特に注目したいことは、細石器を伴出する土器が特殊な型式であることである。考古学では特殊な型式の土器が発見されると、その他名をとつてその型式の土器の呼び名とする慣例になつておる、例えは東京の本郷弥生町で初めて発見されたものを弥生式土器と呼んでいるが、吉野台の土器を今後浦幌式と呼びたいと思う。浦幌式の口縁部に連続並列して施された型押文はかつて櫛目紋であると学界に報告され、学界でもその実物に接する機会がなかつたのでそのまま信じられていたのであるが、14日以来この種の土器を多数発掘して詳細に調べた結果、櫛目紋であるというのは誤りで実は廻転式の撚糸紋であることが明瞭になった。尚地元の有志の方々の御意嚮で、今度発掘した遺物は北海道大学に保管することになったので今後は広く浦幌村吉野台の遺物が紹介され学界に貢献することが出来るのは嬉しいことである。それに伴つて吉野台遺跡の重要性が益々広く認識されるようになるが、それにつけても貴重な文化財である吉野台を郷土の皆様と共に充分保護するように致したいものである。

(24日稿)

名取武光は、この調査結果について1960(昭和35)年になって住吉町式と関連ありとみて縄文早期に位置付けた(名取、1960)。

しかし、他の研究者は冷淡で例えは吉崎昌一(1956)が「新吉野の遺跡のブレードは石器の性質からみて、縄文文化の仲間とは考えられない」とか、児玉作左衛門・大場利夫(1958)が「むしろ縄文文化に接近した年代に、本文化が形成されたものであろうという事実に留めるべきである」とう考えを明らかにしている。

その後の調査研究活動については周知のとおりであるが、本遺跡の報告は断片的なものが多く全

容が未だ知られることは不幸なことである。その中で、本遺跡の出土品がわずかでも図示されたのは、次に掲げる文献のみである。なお、ここには表面採集の資料も含まれている。

- 林 欽吾(1953)「日本北辺の古文化と種族」『ロシア人日本遠訪記附篇』 東京
- 名取武光(1960)「道指定浦幌新吉野台細石器遺跡」『北海道文化財シリーズ』2 札幌
- 大場利夫(1962)「埋蔵文化財」『北海道文化財シリーズ』4 札幌
- 斎藤武一・有沢一則・岩谷朝吉・松下亘(1966)『富良野東山—北海道富良野町の石刃鎌文化の遺跡—』 富良野
- 木村英明(1972)「北海道先土器時代文化終焉に関する一理解」『古代文化』19—2 京都
- 後藤秀彦・佐藤訓敏(1975)「浦幌新吉野台細石器遺跡出土の遺物」『浦幌町郷土博物館報告』6 浦幌
- 佐藤一夫(1975)「先史時代」『苫小牧市史』 苫小牧
- 木村英明(1976)「石刃鎌文化について」『江上波夫教授古稀記念論集』考古・美術篇

こうしてみると、米太郎自身の手になるものがないのは残念である。米太郎がこの名取武光との調査をどのように考えていたのか知る由もないが浦幌町教育委員会あての米太郎からの札状には「浦幌村は浦幌川筋、シタコロベ川筋併々に特別の旧文化遺跡に恵まれておりますので何れ其の内今迄の調査報告を申上度と存じております」と、あり、他の遺跡も含めて報告の用意があったようである(Fig. 5)。

1950(昭和25)年以後の米太郎には目だった業績はない。浦幌式土器について名取武光とともに日本人類学会日本民族学協会連合会での研究発表のほか、晩年になって『北海道考古学』の第1・2・4輯に帯広市周辺の遺跡について略報しているのみである。

このうち、第2輯に発表した「幕別遺跡調査略報」中の図示された土器(米太郎は「南勢式土器と呼んでいる)は初期の後北式土器であり、十勝地域では今もって類例の発見はない。畠宏明らは